

生誕90年いま椎名麟三を見直す

—東京では“邂逅忌”、関西では“自由忌”
が毎年語り継がれている—

田麿 新

椎名麟三（1911～73）のことを聞いても戦後文学の旗手であったと、まともにこたえられる人が少なくなった。特に若い人たちは椎名麟三は知っているが、麟三のことは知らないという。

若い人たちの親の時代、つまり敗戦の混乱期に活字に飢えた青年達にさかんに読まれたのが『深夜の酒宴』や『重き流れのなかに』つづき『永遠なる序章』の作品があげられる。さらに『自由の彼方で』や『美しい女』を思い出してもらえる人は、まぎれもない椎名文学の熱烈なるファンだったといえる。

それでも思い出せない人がいると、関西では同時代の作家の野間宏をあげ、さらに武田泰淳、中村真一郎とか埴谷雄高の名前を連ねてみる。

それら同時代の作家を戦後第一の新人と呼んでいたころ、戦後文学を語る時に欠かせない。そして発表された作品について議論をたたかわせ、新しい実存主義文学の構築を果敢に語りあっていた。その連帯する意味から“あさって会”なる会は共通の場をもっていた。その6人からなるメンバーもいまは全員亡くなった。ちなみに、鬼籍入りを順にたどると梅崎春生、武田泰淳、椎名麟三、中村真一郎、埴谷雄高そして堀田善衛が思い出せる。

そのメンバーらと同時に大岡昇平、三島由紀夫に福永武彦らも記憶のなかに存在している。戦後文学は、そののち第三の新人たちが迎いい

られるが、毎年2回発表される芥川賞の受賞作家がその時代の風俗とかかわって、今日につながっている。

話が横道にそれたがひとりの作家が紡ぎだした作品は、彼らの体験であったり、育った環境や家庭の事情であってもそのリアリティーを浮き彫りにすることによって、作家と読者との親密性がうみだされる。そしてその作品の背景や思想性が作家自身とあたかもメルピスの輪のごとく読者を包み込んでしまう。

その一例として椎名と三島の生い立ちを比較するのも読者側の創造性を刺激し、いっそうその虜にするのではないかと思う。

椎名は生涯、自分は私生児だったという脅迫感に捉われていた。というのも、母親は播磨いまの姫路の山奥に生まれ、13歳で大阪に奉公にでる。花嫁修業とは名ばかりで、子たくさんの口べらしだった。だが、村ではこんな習慣は当たり前。20すぎて、知り合った警官となさぬ仲に。正規の婚姻届けのないまま母親は椎名を出産する。

明治の終わり封建社会の田舎では、奉公さきでの妊娠は笑い者に。古里に引き戻されても祝福されぬ闇の子であってみれば、出産3日後に赤子を抱いて鉄道線路の上をさまよっている。それだけに決意のほどがうかがえるが、幸いなるかな、村の巡査に助けられる。椎名は成人してその話を聞くたびに「あのとき列車に撥ねられていたら、一巻のおわり」だったとエッセイにも書いている。

一方三島は産湯に浸かったたらい桶に反射しているかげろうの記憶があると。この話は繰り返されて有名だが、三島の感受性の豊かさを象徴しているとして、あえて否定するものがない。

また、椎名は生まれた場所が、母屋でなく牛小屋だったことを長らく背負い込んでいて、

39歳のクリスマスに洗礼を受けるが、馬小屋で生まれたキリストにおもいを重ねるのだった。

ふたりの作家の家庭環境の違いはあきらかで、椎名は父と別居した母親の汚辱にまみれた姿を何度も見聞きするばかりか、仕送りの断たれた母子家庭の貧困からくる母のスクランダラスな暮らしを思い出し、せきさらに書き止めている。母親に見捨てられ、自ら家出をする。そして母親の何度にもわたる自殺未遂があっても、なおその母親が最後まで愛しくて仕方がないのだ。

片や三島はまず裕福といえる両親とともに樺太庁の長官にまで出世した官僚の祖父母とも同居している。播磨出身で百姓の血筋をもつ祖父のことが一切ふれられず、何故か祖母が仕えた宮家での躰を身にまといあたかも公家の血筋である家系に塗り替える自由に固守する。

作家はその生み出した作品が生命であることは議論の余地を与えないが、椎名は家出のち出前持ち、コック見習いの職を代わりながら、不良仲間とも一線を敷き、勉強する心は捨てなかった。のちに山陽電鉄（いまの）の車掌につき、共産黨員になる。わずか18の時である。2年ほどで全国で一斉検挙のさい捕まったのち、留置所をたらい回しのはて、拷問による転向。2年足らずで出所。そののちも特高の尾行のなか上京して、運送業やコックに。留置所で読んだニイチェの『この人を見よ』からドストエフスキーにめぐりあい小説を書き始める。

簡単に椎名の経歴をたどったが彼の作品が重く暗いという世評は、過去の体験から生み出されている。しかし、そうした一面のほかに滑稽でつねにユーモラスな哀歎にみちた主人公の人生模様の評価が少ない。

三島は王朝文学につながる華麗な美の世界を、もてる才能のすべてを駆使して、独特の物

語作家との違いがある。

☆

椎名が亡くなって、姫路の古里の山の上に文学碑を建立したあと姫路にも文学館が開館するのだが、その映像的な展示準備のひとつに「椎名麟三と戦後文学」なる鼎談のVTR撮りをしたときに、参加者の野間宏、中村真一郎、埴谷雄高それぞれに椎名の代表作をお聞きした。

野間さんは最後の長編作『懲役人の告白』をあげ、中村さんは、代表作をあげるのではなくてその変貌していく、変貌そのものがかれの文学だと。埴谷さんも同作品の評価を喜びながら、この変貌を成熟の一つとして見るか。変貌自体が流転の経過と見れば上昇でなく下降と語っている。椎名が洗礼を受けるまでの『邂逅』を選びたかったのか。三人三様の評価を司会をつとめていたわたしが感銘したことを思い出している。

TV嫌いの埴谷さん呼び出し、最後には色紙に寄せ書きを頼んだときも「われわれは文学者で文士でないから、嫌だ」と、そこを「椎名のことだから仕方がない」とあきらめてもらい埴谷さんの色紙を手にした。

この鼎談は埴谷雄高全集の第17巻に収録されている（講談社）。

椎名の没後27年、全国の書店でいま椎名の作品を手にすることは困難。わずか『私の聖書物語』（中公文庫）がただ一つ。大手の書店で「新潮日本文学」64巻中④、「近代日本文学大系」筑摩書房97巻中⑥、「昭和文学全集」小学館35巻中⑦、にお目にかかれるかも知れないが。その小説の他にエッセイ、評論に演劇をはじめラジオ・ドラマ、テレビから映画も3本残している。「煙突の見える場所」、新潟の柏崎の油田地帯でロケした「鶏は再び鳴く」なども懐かしい。

わたしが椎名と知り合ったのは、学生のころで椎名の初めての自叙伝ともいわれる『自由の彼方で』が出版された後だった。椎名さんは同郷の青年からの便りに30年をふりかえり、文通をはじめ。古里にたいして犯罪感を背負っていた椎名は長すぎた不在、不義理を修復するかのように、その家族とのつきあいに専念する。

文学で名をなし、原稿依頼の多忙にもかかわらず。几帳面すぎた椎名の下坂がつづき、その2年ののちに心筋梗塞で倒れる。医者から就筆を禁止されるが、その死の宣告を無視。生活のために懐にニトロールをしのばせ作家活動が15年つづく。椎名麟三全集は24巻（冬樹社）に及ぶ。

いま少年の犯罪が野放しに増え、学校で職場でいじめや差別が集団的に凶悪化しエスカレートしているが、椎名が描いてきた弱者の文学、抵抗の証しを少しでも感じてほしいものだと思う。

どつかれても、どつかれても、耐え忍ぶ精神のありようを学んでほしい。ひとくちにいつても、集団のなかでの孤立無援は自殺に追い込まれやすいが、その選ぶみちをただひとつだと決めないでとどまってほしい。

「わたしには、信頼している仲間がいる」「尊敬できる親がいる」「生きていれば、やがてはこちよい空間を探し出せるんや」と大空を見上げて一息ついてほしい。

こうした弱虫の叫び、助けてくれと訴えることで椎名の文学が成り立っている。

まもなく椎名の命日3月28日がやってくる。冬の間を耐えてきた木々の樹液が活発になる。ほそい梢になんとかあかみがさし、かたいつぼみがふくらみ、ぼんやりと、ものうげにかすむ開花の予感。椎名はそんな寒い早朝の刻に脳内出血で昇天した。62歳。

わたしはその訃報を夕刊で知る。大阪の事務

所の窓に夕立の通り雨が見えた。椎名は生まれた日もあの納屋も雨にまみれていたので「わたしの死ぬ日も多分雨が」と生前にきいていた通りになった。キリストが昇天したゴルゴタの丘も嵐であったことと重ねていたのだろうか、その通りになった。

そののちから東京では、椎名が創設したプロテスタントの文学集団「たねの会」や演劇関係者、文芸評論家らによる「邂逅忌」が開催されるが今年から会場が変更になった。毎年ミニ講演とミニ・ドラマも見られる。問い合わせは03-5684-3059。

関西では姫路文学館で「自由忌」が開かれている。

(たなびき しん・作家)

*この原稿は、2001年3月28日に記念館にて開催されました、世話人会主催・キリスト教研究所共催「邂逅忌」の際に、田摩新氏本人よりいただいたものです。田摩新氏には、この場を借りてお礼申し上げます。